

## ネパールヒマラヤ、ヤッカルカ マナン地域におけるテチス堆積層のヒマラヤ隆起運動以前の横臥褶曲構造

### Pre-Himalayan uplift event and deformation of recumbent folds in Tethyan sedimentary succession of Manang area, Nepal Himalaya

# 鈴木 茂之 [1]; Dhital Megh Raj[2]; 吉田 孝紀 [3]; 川村 寿郎 [4]; 山中 晶子 [5]; Regmi Amar Deep[6]; Gyawali Babu Ram[6]; 大友 和夫 [7]; 湯川 弘一 [8]

# Shigeyuki Suzuki[1]; Megh Raj Dhital[2]; Kohki Yoshida[3]; Toshio Kawamura[4]; Akiko Yamanaka[5]; Amar Deep Ragmi[6]; Babu Ram Gyawali[6]; Kazuo Otomo[7]; Hirokazu Yukawa[8]

[1] 岡大・理・地球; [2] トリブバン大; [3] 信州大・理・地質科学; [4] 宮城教育大; [5] 信大・理; [6] トリブバン大; [7] 東北大・理・地学; [8] 岡大・自然科学・地球

[1] Earth Sci., Okayama Univ.; [2] Toribhuwan Univ.; [3] Geology, Shinshu Univ.; [4] Miyagi Univ. Edu.; [5] Science, Shinshu Univ.; [6] Tribhuvan Univ.; [7] Earth Sciences, Tohoku Univ.; [8] Earth Science, Okayama Univ

アンナプルナ山北側の Marsyangdi Nadi 河沿いの Yak Kharka-Manang 地域における、テチス堆積層の三畳系の連続セクションを作成するプロジェクトの一環として、地質構造解析を行った。調査地域にはペルム紀から三畳紀の地層が分布するが、褶曲によって地層が逆転する部分もある。褶曲構造の解析には P/T 境界など鍵になる層準や地層の追跡、地層の上位方向、褶曲作用に伴うスレート劈開の解析などを利用した。その結果以下のように F1, F2, F3 の褶曲構造が識別できた。

F1 褶曲構造は軸面がほぼ水平な閉じた横臥褶曲をなし、本地域の地層は一つの向斜構造に参加している。褶曲軸面に平行なスレート劈開 (S1) が調査地域全域の泥質岩に発達しており、これは定向配列する再結晶したイライトと黒色シームで特徴づけられる。横臥褶曲の向斜軸部の大露頭が Ghyanchan の斜面で観察できる。軸部で北に地層が新しくなる北フェルゲンツの褶曲である。

F2 褶曲構造は軸面の走向が NE-SW 方向で北に傾斜する閉じた過褶曲をなし、本地域北東部に背斜構造が露出する。褶曲軸面に平行なスレート劈開 (S2) が形成され、調査地域北東部を中心に認められる。顕微鏡下では微細なイライトの定向配列と黒色シームで特徴づけられ、S1 スレート劈開組織を切っていることが観察される。軸部で南に地層が新しくなる南フェルゲンツの褶曲である。

F3 褶曲構造は開いた鉛直褶曲をなし、褶曲軸は NE-SW 方向を向く。先在する F1 と F2 褶曲を弱く変形している。

F2 褶曲は南フェルゲンツで、南に衝上するヒマラヤ山脈の隆起運動に関連すると推測される。F1 褶曲は北フェルゲンツでその隆起運動のセンスと逆になり、その運動以前の地殻変動によるとみなされる。

